

---

# 鈴の音

一稀

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

鈴の音

### 【コード】

N9209N

### 【作者名】

一稀

### 【あらすじ】

好きな男の子がまだ前の彼女に未練を持っている。そんな女の子の複雑な心境です。

鈴の音を聞いたことがありますか？

あの鈴の音はとても涼やかで、心に響いて、とても切ないのです。

鈴の音が鳴る。

それだけで誰か分かってしまう。

いい加減、そんな自分にもうんざりしながら見えない相手呼び止める。

「佐野？」

足音は止まった。

「おお、またさぼり？」

白のカーテンがめくれ知った顔が覗き込む。

ここは保健室。

私は睡眠を貪るためにベッドにもぐりこんでいた。

「うん。佐野は？」

上半身を起こして聞く。

「俺？ 負傷」

佐野は自慢げに右手のかすり傷を見せる。

「ただのかすり傷じゃん」

「お前なあ、かすり傷をバカにするなよ」

「はいはい。先生いないから適当に手当てしなよ」

「ん」

返事をする佐野は椅子に座り込む。

私と佐野の間をカーテンが仕切った。

たぶん、うまく手当てできてないだろうな。うん、っていつか絶対。

ちらつとカーテンをめくると、かすり傷に包帯を巻いている佐野

が見えた。

「…かすり傷に包帯はないんじゃない？」

「うわっ、驚いた」

佐野は一瞬ビクツとし、振り向く。

「消毒したの？」

ベッドからおり、佐野の向いの椅子に座る。

「しょどく？」

「…はいはい」

私は佐野から包帯を奪い、手当てをする。

「器用だな」

「そりゃどうも」

名札に付けた鈴から音がする。

その鈴、まだ持つてるんだ。

その鈴、見ててつらくない？

その鈴気に入ってるからつけてるの？

それともやっぱり…。

その鈴…その鈴…。

聞けない疑問が浮かぶ。

「サンキユ」

「いえいえ」

私は視線を合わさずに答える。

「…次から気を付けなよ？」

「ああ。悪いな」

照れ笑いをする。

「ばか。謝るな。」

「はいはい」

佐野は黙り込む。

沈黙が流れる。

「その鈴、まだ持つてるんだ」  
「耐え切れず口を開く。」

「あ？ ああ、まあな」  
「見てることちがつらくなる。  
知らないでしょ？」

「未練がましいけどな」  
「本当だよ、全く。」

「やっぱり捨てられないんだ」  
「知ってるよ、そんなの。」

「…まあ、仕方ないんじゃない？」  
「私はそう返す。」

「だよな」  
「苦笑いの佐野。」

「やっぱり聞くんじゃないかな。そう後悔した。」  
「まだ好きなんだ？ あの子のこと」

「私の言葉に佐野は優しく、つらそうに笑う。」  
「あゝあ、私の心もバキバキだ。」

「…ごめん」  
「気づくと謝っていた。」

「なんで謝んのさ。気にすんなよ」  
「…どーも」

「そうだよな、全く気付いてないもん。私の気持ち。」  
「だったら、今は気持伝えなくて精一杯応援してやるよ。」

「…本当は嫌だけどさ。」  
「そんな辛そうに笑わないでよ。」  
「普通に笑ってよ。」

「佐野の笑顔は私じゃ元に戻せないの、知ってるよ。」  
「じゃあ、俺授業に戻ってくるな」

「佐野は立ち上がる。」  
「鈴の音が鳴る。」

あの子に…佐野が大好きな子にもらった鈴。

「ああ、じゃあ、授業頑張って」

私はそれだけ言うと再び保健室のベッドに戻る。

カーテンが私たちの間を遮ると、佐野は出て行った。鈴の音とともに。

ばーか。忘れられないのは分かるけどさ、つらいのもわかるけどさ。

苦しい道自分で選んだのなら、逃れられないよ。分かってるくせに。

それでも忘れられないんだから、苦しんじゃえ。

…嘘だよ。幸せになってよ。こっちまで辛いんだよ。

鈴の音は遠くへ消えた。

私は保健室のベッドにもぐりこむ。

目をつぶると耳の奥に、まだ鈴の音が残っていた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9209n/>

---

鈴の音

2010年10月9日18時13分発行